

オスマン末期のパレスチナ人にとっての郷土／祖国 ——ハリール・サカーキーニーの日記を入りに

田浪亜央江（広島市立大学）

キーワード：オスマン帝国、移民、パレスチナ、郷土、歴史的シリア、祖国

はじめに

1908年7月、ニューヨークで一人のアラブ人青年が、1年に満たないアメリカでの生活に見切りをつけた。故郷を離れて3ヶ月後に知らされた親友の死のショックが尾を引いていたばかりでなく、アメリカで一財産つくるという目論見は、前年10月に発生した金融恐慌に続く不況のため、すでに碎かれていた。恋人と故郷エルサレムへの焼けつくような恋しさは彼を苦しめるばかりで、アメリカでの生活に展望は残されていないのは明らかだった。しかし故郷で待つ恋人に、いったいどんな姿をさらせばいいのだろうか。

だが、彼が7月25日に「帰国 (al-ruju:)'」の文字を日記のなかに書き込んだときには、それにはすでに明確な意味が付与されていた。その日の朝に読んだ新聞記事の内容が、追いつめられた自分の状況を一気に変えることに彼は気づいたのだ。

「今日アラビア語の新聞で、スルタン閣下が国に憲法を許されたのを知った。いま国に帰るなら、それは意味を持つ。夢から覚めて、あらゆる機会が私の前に大きく広がる。今なら国のために働ける。今なら学校や新聞、若

者のための団体を設立できる。今なら制約なしで声を上げられる」。

ここでの「スルタン閣下」とは、自ら憲法を停止して以来、30年間の専制政治を続けていたオスマン帝国のアブドゥルハミト2世であり、「出版の自由」を含むオスマン帝国憲法は、ここに復活したのである。「青年トルコ人革命」と俗に言われるこの革命は、翌年の反革命クーデターとアブドゥルハミトの廃位、続いて「統一と進歩」派の権力掌握という、オスマン帝国の大転換期の入り口を作り出した。

一方で、アメリカで失意に喘いでいたこの青年、エルサレム出身のクリスチャンである当時30歳のハリール・サカーキーニー⁽¹⁾の帰国は敗者・失敗者の烙印を受けることを免れる。彼は国のために働くべく戻った若者としてコミュニティに受け入れられ、のちに恋人スルターナ・アブドゥとの結婚を果たすのである。

彼が帰国する「国」とは、現代ならば占領下のパレスチナに他ならない。だが1908年のサカーキーニーは、先の引用に続けてこのように祖国を名指しする。「シリアよ、君の心の安らかであることを。私は大いに耐え、大志を抱く者たちの帰還という君の願いをここに受け取った。シリアよ、万歳」[1908/7/25]⁽²⁾。

ここでのシリア（スーリヤー／Sūriyā）は当時オスマン帝国の一地方で、後のシリア、

(1) ファミリーネームは定冠詞付きのアル＝サカーキーニー Al-Sakākīnī であり、名とつなげた場合はハリールッサカーキーニーと発音されるが、煩わしさを避けて本稿ではハリール・サカーキーニー、またはサカーキーニーとする。

(2) Musallam, 'Akram (ed.), 2003, *Yawmīyāt Khalīl al-Sakākīnī: Yawmīyāt. Rasā'il. Ta'ammulāt. Kitāb al-'Awwal: Nyūyūrūk. Sultānah. Al-Quds. 1907-1912*, Markiz Khalīl al-Sakākīnī al-thaqāfī. 以下、『ハリール・サカーキーニー日記』第1巻からの要約・引用部については、本文中に〔年／月／日〕のかたちで示し、他の巻については巻号をその前に付す。

レバノン、パレスチナ、ヨルダンを含む地域であり、現在では「歴史的シリア」または「大シリア」と呼ばれている（以下、特に明示する場合を除き「シリア」はこの意味で用い、「シリア人」はこの地域出身者を指すものとする）。パレスチナの領域が、のちにイギリスがこの地を委任統治 [1922—1948] することによって定まったものである以上、当時のサカーキーニーが祖国をパレスチナの名で呼んでいないことは当然とも言える。一方、以下に見るように、パレスチナという領域概念はイギリスの委任統治によって初めて生まれたわけではなく、すでに 19 世紀にはそれが大雑把に意識されていたという指摘もなされている。

本稿は、イギリスの委任統治開始に先立つ時代を生きたパレスチナ人が、自分の生きる「国」をどのように呼びそれにどのような意味を込めていたのかという素朴な疑問から出発している。その手掛かりとして、ここではイギリスによる実質的な統治開始から 10 年あまり先立つ時期に国外にいたハリール・サカーキーニーの日記を読んでゆく。彼の名指した祖国や郷土が彼にどのようなものとしてイメージされていたのか、彼がおかれた状況や時代背景を個人的な事情と同時代人の共通経験の両側面をとおして見てゆくことで、今日の国民国家体制におけるナショナリズムとは異なる愛国心／郷土意識、アラビア語で言う「ワタニーヤ」のありようを探ってみたい。

1 ハリール・サカーキーニー日記とサカーキーニーのアメリカ生活

サカーキーニーとその日記

ハリール・サカーキーニー [1878-1953] は、オスマン帝国末期および英国委任統治下のパレスチナで活躍した教育家・社会活動家である。同時代人に敬愛されたルネサンス的知識人としてのイメージは、今日のパレスチナ人のあいだに広く共有されており⁽³⁾、ラーマッラーにある「ハリール・サカーキーニー文化センター⁽⁴⁾」や、エルサレム市内の二つの公立学校にもその名が残されている。

サカーキーニーは 1878 年 1 月 23 日、エルサレムのギリシャ正教コミュニティに生まれた。父親はムフタル⁽⁵⁾で、父方の祖母はイスタンブール出身のギリシャ人であり、トルコ語、アラビア語、ギリシャ語を母語としていたという [vol.5 1933/1/17]。こうした環境が、サカーキーニーのコスモポリタンな指向性に強い影響を与えたことが指摘されている。プロテスタント系のシオン英語学院を卒業すると、アメリカに旅立つまで英国系・フランス系・ロシア系の学校で教師をしていた。帰国後はギリシャ正教コミュニティのメンバーによる教会改革運動に関わり、1909 年に当時としては画期的な自由主義的教育方針に基づく「ドゥストゥーリーヤ学院」を設立する。イギリス委任統治開始当初はアラブ民族運動に関わり当局と距離を置くが、後年は教育監督官として安定した生活を送るようになる。しかし監督官引退後に最愛の妻スルターナを癌で喪ったほか、1948 年にはユダヤ軍による追放作戦によりパレスチナを追われ、数年後に避難先のカイロで客死するという、同時代のパレスチナ人と共通する苦難を

(3) アル=ジャジーラ放送が 2010 年に作成した Al-Film al-Wathā'iqī “Khalīl al-Sakākīnī: Yawmīyāt 'Insān” (ドキュメンタリーフィルム「ハリール・アル=サカーキーニー ある人間の日記」) は、その一端を伝えている。

(4) このセンターは 1996 年にパレスチナの文化継承・発展のための活動拠点として設立され、元ラーマッラー市長の私邸として使われていた建物に場所を置いた。こうした施設にサカーキーニーの名が冠されたことに、現代パレスチナ社会における彼の位置が現されている。

(5) 「選ばれた者」の意味だが、選挙ではなく伝統的にコミュニティ内の合議で決められる存在で、コミュニティ内の問題の調停や相談役などを行う世話役である。

味わった。

サカーキーニーの手による日記と書簡類は、8巻におよぶ『ハリール・サカーキーニー日記』として2003年から2010年にかけてパレスチナで刊行され⁽⁶⁾、彼個人の思想や足跡を知る手掛かりとしてだけでなく、当時のパレスチナ社会や文化のありように関する貴重な資料となっている。本稿で対象とするアメリカ時代の日記は、恋人スルターナへの手紙とともに第1巻の大部分を構成する。サカーキーニーはその後の生涯の大部分のあいだ日記を書き続けており、オスマン朝末期から委任統治期を通じ、パレスチナの知識人の残した日記や書簡類で、サカーキーニーのもののほど詳細かつ長期にわたるものはほかに見当たらない⁽⁷⁾。ただしサカーキーニーの日記でおもに注目されているのは、その前半部分のオスマン帝国末期から英国の軍政時代であり、アメリカ時代については、これまでのところあまり取り上げられていない⁽⁸⁾。本論考の趣旨とは異なるが、パレスチナを代表する知識人・文化人であるサカーキーニーの、のちの姿からは考えられないような弱さや欠点を見せる青年期の日記や手紙は、それ自体興味深い。

同時代シリア人のアメリカ移住とサカーキーニーのケース

サカーキーニーのアメリカ滞在は1907年の11月半ばから翌年の8月頭までの9ヶ月足らずで、往復の船上の時間を加えても故郷を不在にしたのは約10ヶ月間である。結果的にさほど長期とは言えない滞在となったが、経済的に成功した場合はスルターナを呼び寄せてアメリカを生活の拠点にすることも視野に入れていた。サカーキーニーは、当時成功を目指してアメリカに移住した多くのシリア人の一人として、アメリカに渡ったのだった。

19世紀末から20世紀前半までのオスマン帝国領内からのアラブ系移民の大部分は、シリア出身者だった。アメリカへのアラブ系移民に関する最初の研究書を出したヒッティーによれば、1899年までのアメリカ当局の出身国別分類では、シリア人はアルメニア人、ギリシャ人、トルコ人とともに「アジア側トルコ Turkey in Asia」の枠に入れられており、詳しい実数は不明である⁽⁹⁾。1899年から1919年までのシリア人移民の総計は、89,971人という数字が出されている⁽¹⁰⁾。移民の背景として、オスマン帝国の政治的迫害や1860年のレバノン山地での内戦⁽¹¹⁾といった

(6) サカーキーニーの死去から2年後の1955年の段階で、日記の一部が刊行され (*Anā Kadhā Yā Dunyā. Al-'ittiḥād al-'āmm li-l kuttāb wa al-sahāfiyīn al-filastīniyīn*)、1990年にはヘブライ語訳も刊行されている。

(7) オスマン朝末期から委任統治期のパレスチナ人の日記や回想記の研究は、近年パレスチナ人の手によって急速に進められており、サリーム・タマーリーが草分け的な存在である。

(8) 論文としては Tamari, Salim. 2003. A Miserable Year in Brooklyn: Khalil Sakakini in America, 1907-1908. in *Jerusalem Quarterly* 17 がある。以下も参照。Schayegh, Cyrus. 2017. *The Middle East and the Making of the Modern World*. Harvard University Press. pp.28-33. また、Peled はそのパレスチナ文学論のなかで、サカーキーニーがニューヨークから書き送った書簡類は「パレスチナ人の文学表現の遺産の一つ」と考えられるべきだと述べている。Peled, M.. *Annals of Doom: "Palestinian Literature -- 1917-1918"*. In *Arabica*, T. 29, Fasc. 2 (Jun., 1982). pp. 143-183.

(9) Hitti, Philip Khuri. 1924. *The Syrians in America*. George H. Doran company. p.62.

(10) Annual Report of the Commissioner General of Immigration to the Secretary of Labor: Fiscal Year Ended June 30, 1919. p.168. 同時期のアルメニア人移民の総計は 55,570 人、ギリシャ人 441,387 人、トルコ人 20,901 人。ちなみに日本人の総計は 223,188 人となっている。

(11) レバノン山地でのクリスチアンのマロン派とイスラームの分派ドゥルーズの衝突。藤田によれば、農民による土地分配制度実現の動きに対し、両派の領主がそれぞれ、宗派对立の構図を作って革命を分断・埋没させたもの（藤田進「パレスチナの土地と農民 ——ヨーロッパ管理下から植民地化への道」258頁、有志舎『土地と人間 現代土地問題への歴史的接近』[2012年]所収）。マロン派を支持するフランスがこれを機に介入し、レバノン山地にキリスト教徒の自治区（ムタサッリフィヤ）を作り、オスマン帝国の直接支配から切り離してフランスの影響下に置いた。

政治的要因と、1869年のスエズ運河開通によるシリアからの絹輸出の不振といった経済要因が挙げられる⁽¹²⁾。しかしこれらの影響を受けたのはおもにレバノン山地周辺であり、ナザレやヘブロン、エルサレムなど現在のパレスチナの都市部からの移民はごく限られていた。シリア移民のうち現在のパレスチナ領域部からの移民の数は不明であるが、ナフは「取るに足らない」とし、1901年から1939年までのあいだで確認できる数としてわずか8,425人という数字を挙げている⁽¹³⁾。つまりエルサレム出身のサカーキーニーは、同時代のシリア移民のなかでもマイノリティだったことになる。

1907年10月22日、サカーキーニーはスルターナとの関係が互いの家族の公認のものになる前にニューヨークに向かったが、彼が結婚資金を作ることを第一の目的として渡米したと考えるのは自然であろう。しかしタイミングから考えて、スルターナに明確なアプローチをするようになる前から渡米の計画を立てていたようだ。とするならば、仮にスルターナに思いを受け入れられなかったとしても、彼は傷心しつつ渡米していたことになる。その理由は日記からは判然としないが、弟のユースフがすでに渡米し、フィラデルフィアでセールスマンをしていたことは、サカーキーニーの渡米の決断に大きく影響を与えたはずだ⁽¹⁴⁾。アメリカでの不本意な生活の中で帰国に言及した日記の中には、「帰国して目上の者に仕切られる教育活動に戻り、毎日つらい思いをして人生を地獄にするのか？」という記述もある [1908/5/15]。自分の思うように出来ないまま教育に携わるといふあり

方から抜け出したいという強い願望が伺える。

アメリカへ向かう前、サカーキーニーがスルターナに宛てて書いた恋慕と別れを惜しむ情を切々と訴える手紙のなかで、アメリカでどのように生計を立てるのかなどの具体的な計画については、一切触れていない。下に見るように彼が世話になるファラフ・アントーンには、渡米して早々の1908年1月1日、「この国に来る前に私に相談してくれていたなら、来ないように忠告していたのに」とさえ言われている。サカーキーニーは確約もないまま、新聞向けの執筆とアラビア語の個人教授の口をあてにアメリカに乗り込んだのである。渡米のタイミングが恐慌直後だったことに加え、サカーキーニーのこの無計画さが、アメリカでの困窮の一因だったことは容易に想像できる。

ヒッティーはアメリカでシリア移民が従事した主な職業として、織物売買、行商、雑貨商、輸出業、工場労働、農業などを挙げている。ビジネスを始めるための資本も技能も持たなかったことはともかく、知的労働で身を立てようと考えたサカーキーニーは、かなり特殊な立場にあったはずだ。

失意のアメリカ生活

ブルックリンのアパートにルームシェアをして住んだサカーキーニーはファラフ・アントーンが発行するアラビア語ジャーナル「アル＝ジャーミア」⁽¹⁵⁾のオフィスに日参し、やがて自分の書いた記事が掲載された喜びを記す [1908/1/11]。しかし彼に特定のポストが用意されていたわけではなく、引き続き単発

(12) Hitti, *ibid.*, pp.49-50.

(13) Naff, Alixa. 1993. *Becoming American: The Early Arab Immigrant Experience*. Southern Illinois University Press. p.111

(14) Hitti は移民を促すプル要因として、先に移民した者が手紙で移民を薦めたりアドヴァイスをするを「ペンの力」と表現している [Hitti. *ibid.* p.52.]. なお、ここではユースフに対するサカーキーニーの筆致から判断し、彼をサカーキーニーの「弟」としたが、両者の出生順位は管見の範囲では明らかではない。

(15) 「アル＝ジャーミア al-Jāmi'a」は1899年3月、カイロで刊行され、1903年の後半から3年間の休刊を挟み（その間にアントーンがアメリカに移住）、1906年7月からニューヨークで刊行されるようになった。発行形態はときおり変更され、1907年前半には日刊紙の刊行が主軸となり、半年間雑誌が刊行されなかった。同年9月からは週刊紙と月刊誌の二本立てとなっている。なお、ジャーミアとは連盟／コミュニティの意である。

の記事を書いたり翻訳を手伝ったりするのがせいぜいだった。

コロンビア大学のオリエント研究者らの翻訳の仕事を受け、同大学の学生などにアラビア語を教えはじめるが、それもまた不安定だった。到着から約一ヵ月後にスルターナに宛てた手紙では、「これまで3人しか生徒を見つけれなかった」と告白しながらも、アラビア語ネイティブを必要とする研究者と知り合いになったことを急いで付け加え、「こうやって、日を追うごとに人と知り合いになればいい」、「そのあかつきには、なにごとかをなせるに違いない」と、前向きな展望を語る [1907/12/22]。

他方、同じころ親友のダーウドに宛てた手紙の一節には、「クリスマス休暇のために、生徒たちのレッスンは止まって2週間経った。そのかん何の収入もない。15日前に洗濯屋に服を出したが、代金を払えないので預けたままだ」とある [1908/1/1]。ポケットには10セントしかなく、パンを買って紅茶で飲み込んだ、という年越しのようすを訴える。ダーウドはサカーキーニーにとって、彼とスルターナとの関係を唯一知る人物であり、またスルターナに対してはさすがに躊躇したであろうこうした内容についても、書き送ることのできる相手だった。

そのダーウドの急死が1月に突然知らされ、サカーキーニーの内面生活は暗く沈んだものとなる。しかし渡米の肝心の目的から目をそらし、心を癒す余裕はなかった。年が明けてほどなく、コロンビア大学のオリエント研究者の「ゴッツェル博士⁽¹⁶⁾」を訪問し、アラビア語の写本をチェックするという作業を行い5時間費やすが、報酬の話はされずに感謝の言葉で終わる [1908/1/11]。この後も何度か、無償奉仕になる不安を抱きつつ同博士の研究室で作業を行うことになる。

アラビア語の生徒が思うように増えないばかりか、むしろ減ってゆくなかで、ついに「病

人の慰め役」という依頼を持ち込まれたサカーキーニーは、複雑な思いをもつ [1908/2/24]。雑貨店の帳簿係の仕事に就いたり（始めてみると何の知識のない彼にはお手上げと分かり、翌日には辞める）、エルサレムの写真集を取り寄せアラビア語の生徒に勧めるという行商を試みさえする。6月20日、ついに彼は僅かな荷物をまとめて列車に乗り、自分が働くことになった製紙工場のあるメイン州のラムフォードに向かう。週に10ドルの報酬で、部屋代が1.5ドル、チケット制の食糧は3.5ドル、したがって週あたり4、5ドルは余ると見積もった彼は、久しぶりに安堵した様子を見せる [1908/6/24]。しかし、一日中資材などを運ぶ肉体労働で肩や背中を痛め、一ヶ月後にはラムフォードを出る。このかんにゴッツェル博士と手紙をやり取りして彼からの送金の目処が立ったこと [1908/7/16] は、帰国のための旅費の工面が出来たことを意味していた。ニューヨークに戻ったその朝、新聞で目にしたのが憲法復活の報だった。

2 異郷にあることと「ワタン」

サカーキーニーのアメリカ観

1907年の11月半ばにニューヨークに着いたサカーキーニーは、早くも年明けの2月1日には渡米への後悔を綴っている。「この国に來たことを悔やむ。ここで出会ったのはさまたまな不幸だけだ」。むろん「不幸」の筆頭であるダーウドの死はアメリカ社会と直接関わることはないが、異国で親友の死を聞き、なすすべを持たないことで、渡米という選択の間違いを浮かび上がらせただろう。「いつ帰るか、どうしたら可能か？」 [1908/2/9]、「帰国を考えているが、失敗して戻るのは恥だから、エルサレムへは戻れない」 [1908/2/11] と悩みは深まる。

加えてアメリカ社会やアメリカ人への嫌悪

(16) Tamariによれば、この人物はRichard J. H. Gottheil [1862-1936]で、当時のコロンビア大学のラビ文学・セム語講座の主任教授だった (Tamari, ibid. p.39.)。

を増幅させる出来事が続く。ある夜シリア人の友人たちと会話に夢中になっていると、向かいの部屋のアメリカ人が部屋のドアを棒で叩いて罵声を上げる [1908/2/2]。この出来事がきっかけとなってか、サカーキーニーはアパートを移る。またシリア人の友人と一緒に歩いていると、友人がアメリカ人の子どもたちに背後から小突かれるという出来事があり、サカーキーニーは「憎悪と怒りで震え」、「食事のために席についても衝撃で食べる気になれない」という状態に陥る。「アメリカ人の粗暴で野蛮なことに、いったい誰が耐えられよう？」 [1908/4/12]。さらには彼自身が大勢の子どもたちに石をぶつけられ、「この国にやって来た瞬間を呪う。心から出て行きたいと願う」ことになる [1908/5/4]。さらにシリアレストランの主人から、危険な目に遭いたくなければ5ドルを送金せよと書かれた脅迫状を受け取ったことを聞かされ、「何と居心地のよい国であることか？」と皮肉を述べる [1908/5/27]。こうした記述から、当時のアメリカ社会における移民に対する社会的ハラスメントの一端が伺える。

サカーキーニーはまた、アメリカにおける女性のあり方や男女関係にも違和感をもつ。「工場の入り口で娘たちを待っている若者を見た。出て来ると互いに腕を組んでいる。この国の娘たちの状況を思っつくづく悲しくなる光景だ。自分の美や名誉を危険にさらし能力や価値を軽んじて自身を迷わせ、男の関心を引き仕事を怠けさせて彼らを迷わす」と辛辣に批判する [1908/5/14]。別の日には汗の滴る暑いなかを女性たちが「透けた服で」闊歩しているのを見て苛立ち、「この国は何だ？ 冬は寒さが激しく夏は鉄を溶かす暑さだ」と、気候への愚痴につなげている [1908/5/27]。これは女性に対する性的な眼差しや女性自身の性的欲望が公共空間に表出することをタブー視する中東社会の出身者が、欧米社会に対して抱く典型的な違和感の

一つである。彼の場合、それは必ずしも伝統保守意識や父権主義的なジェンダー観に基づくものではない。弟のユースフが頻繁に酒を飲むのに比べて自制的で、身体の鍛錬を怠らず知的向上心を持ち続けるサカーキーニーは、アメリカの男女のありように自身の嫌う物質的享楽主義を見て取ったのである。

アメリカ人から直接ハラスメントを受けたことは、怒りや憎悪とともに、この国で自分が歓迎されていないという感覚をともなったことだろう。さらにこの社会の習慣や風俗になじめないどころか、それに強い反発をもち批判する。そうした経験は、単に故郷から離れていることへの寂しさだけでなく、アメリカ社会で疎外されているという意識を強め、彼の孤独を際立たせた。「この世界は私の世界ではない」 [1908/3/31]、「私は異邦人であり、社会の生活に入り込めない」 [1908/5/22]。アメリカ社会のありようへの嫌悪感以上に、彼が強調するのはその社会におけるこうした疎外感であった。

ワタンとビラード

そしてこのように言い切る。「アメリカは偉大で壮麗で、満足に値する。しかしワタン waṭan であるには値しない。仕事と真面目さの国であって、喜びの国ではない。金持ちが安楽に暮らす一方で、労働者は疲労と貧困で死んでいる」 [1908/7/24]。「ワタン」とは平たく言えば「ビラード bilād」と同様に「国」を指す言葉であるが、動詞 waṭana（居住する）、派生語として muwaṭin（市民）、mustawṭana（入植地）を持つように、そこに暮らす・生活する場所が含まれている⁽¹⁷⁾。「ワタンであるには値しない」との言葉からは逆に、当初、稼いで貯蓄するための一時的な滞在地としてではなく、アメリカに長く住みそこが自分の「ワタン」となることへの期待さえ存在していたことをうかがわせる。経済的にはかなり甘い見通しではあったが、サ

(17) Muḥīt al-muḥīt qāmūs muḥawwal li al-luḡhat al-‘arabiya p.975. および The Hans Wehr Dictionary of Modern Written Arabic, 4th edition, p.1265.

カーキーニーはアメリカで働きつつ学ぶつもりでいた。知的好奇心や向学心のためであると同時に、学ぶことを通じて知的な交流をもち、アメリカ社会との接点を広げることを夢見ていたのだ⁽¹⁸⁾。

日記の中で故郷を指す普通名詞として頻出するのは、「ビラード bilad (国／故郷)」であり、それに一人称単数所有格を付与した「ビラーディー biladī (我が故郷)」や、一人称複数所有格の「ビラードナー biladnā (我が故郷)」も多用される。現代において、とりわけ離散したパレスチナ人によって、特に一人称単数所有格で「ワタニー waṭanī」「ビラーディー biladī」と言われる場合、両者の差異を説明するのは困難である。ともに、生まれた地や現在の居住地に関わりなく、集団的な離散経験をふまえ祖国としてのパレスチナを指しているといえる。しかしここでは生まれ故郷としての「ビラーディー」と、永住の地と自ら思い定めて住む「ワタン」というそれぞれの含意は明瞭だ。

「いま国 biladī に帰るなら、その帰国は意味を持つ (yakūnu rujū'ī fī maḥallihi)」[1908/7/25]。文字通りに訳すなら、自分の帰国が「そのあるべき場所を占める」ということである。社会に場を占め何らかの役割を果たせること、少なくともその可能性を持ちうると考えることが希望となったのは、社会から疎外されるということがどのようなものであるかをアメリカで経験したからにほかならない。アメリカでサカーキーニーを苦しめたのは、経済的な困窮そのものだけでなく、自分が社会のなかでいかなる場も占めず、さらにはそうした自分の苦しみ自体が、社会的な意味を持たないことにあったのではないか。故郷を離れて彼は初めて、人間がそのような環境におかれうることを知ったのである。

「シリアよ、君の心の安らかであることを。私は大いに耐え、大志を抱く者たちの帰還という君の願いをここに受け取った。シリアよ、万歳」。「はじめに」で引用したこの箇所にはしかし、憲法復活という国全体のあり方を一変させる出来事の報を受け、ややうわずった感情がある。そこから逃げ出してきたはずの「目上の者に仕切られる教育活動」のつらさや、具体的な人間関係を離れ、大きな存在である〈国〉に身を置こうとすることで、経済的な成功を得られずにエルサレムに戻るという個人的な「恥」を乗り越えようとしているかのようなのである。だが、彼がそれまで恋い焦がれ、だからこそ帰国をためらわざるを得なかった故郷とはもともと、大きな存在としての〈国〉の一部として把握されるようなものではなかった。

郷愁の対象

サカーキーニーがスルターナに手紙を書き送るようになるのは、彼が日記を習慣化することに先行している。最初の手紙は1907年10月4日、「スルターナ、スルターナ！君への愛を隠すことはもう出来ない」という、29歳のサカーキーニーのあまりにも直情的な言葉で始まっている。10月7日にスルターナから返信を受け取り、そこに彼女の愛情を打ち明ける内容が書かれていたということが、ダーウド宛の手紙に書かれている。サカーキーニーがニューヨークに向けヤーファから出港したのは10月22日であり、その直前に彼女に愛情を打ち明け、彼女もそれを受け入れていたことになる。

ニューヨークに着いた直後からサカーキーニーは、スルターナ宛の手紙で望郷の念と彼女への思いを切々と訴える。初めて訪れた異国への興味や驚き、新しい生活への希望は、ここでは全く伺えない。

(18) 当初英語の夜学に通う希望をもっていたが、それが難しいと気づくと、せめて毎日英字新聞を読もうと決意する [1908/2/20]。コロンビア大学の教員「ニース博士」にアラビア語を個人教授したさいには、ヘブライ語とシリア語を学ぼうと考え、そうすれば将来自分も大学に拠点をもてるだろうと夢想する。なお、ここでのヘブライ語とシリア語は、聖書研究者にとって必須の古典ヘブライ語、古典シリア語を指している [1908/1/22]。

サカーキーニーがアメリカからスルターナ宛に書き送った手紙は、22通が確認されている。そのうち8通は、ニューヨークに着いた直後の11月16日から1月6日までの間に、立て続けに送られたものだ。サカーキーニーの再三の懇願にもかかわらず、そのかんスルターナからの手紙は届かない。そうした状況のなかで、サカーキーニーは1月11日から突如日記を書き始める。その理由について直接触れられることはないが、スルターナに一方的に手紙を書くという状態からの精神面での切り替えの試みであることはじゅうぶんに想像できる。「シャワーを浴びて、朝食をとり、ニューヨークに出た。まずファラフ・アントーンのところへ行き、記事を渡すと、喜ばれた」[1908/1/11, 91]。こうした調子で、日課のシャワーから始まり、一日の出来事を順に書き記す彼の日記のスタイルは、すでにこの最初の日記のなかで登場している。前述のゴッツェル博士のもとで無償労働を強いられた一件も、この最初の日記に書かれている。スルターナに向けてこんな内容を書き送れないのは明らかだが、胸のうちの明かす相手として彼が日記を選び、その習慣を維持したことに、〈近代的知識人〉としてのサカーキーニーの姿が伺える⁽¹⁹⁾。サカーキーニーの渡米は、経済面では彼にとってまったくの無益だったと考えるしかないが、エルサレムでの生活ではあり得なかった孤独との向き合いこそが、彼を日記に向かわせたことは指摘されて良い。

スルターナに向け、アメリカでの生活については多くを語らないのに対し、サカーキーニーが熱心に書き連ねるのは、スルターナと

共有した時間やその情景の記憶である。1907年11月30日の手紙では、「思い出が次々に押し寄せ、私が笑ったり泣いたりしているのが分かるかい？」と書き始め、「憶い出すよ（'Atadhakkaru）」で始まるフレーズを37回書き連ねている。ここにはサカーキーニーとスルターナが、彼の姉ミルヤーや従兄弟ヤアクーブを伴ってピクニックに訪れた場所として、アイン・カーレムのほか、バカア、ラーマッラー、アルタース、カローニヤー⁽²⁰⁾といったエルサレム近郊の村の名が記されている。カローニヤーへの訪問の翌日に、サカーキーニーはスルターナに最初の手紙を送ったのだった。「憶い出すよ、10月3日、カローニヤーまでミルヤーと君に同行したのを。レモンの葉を摘んだね。私たち皆はその葉っぱをとっておき、その日の思い出にした。帰り道、君のロバがよろめいて、私が手綱を引いた。それで私たちは横に並んだね」⁽²¹⁾。故郷では当たり前前に存在するレモンの葉もロバも、ニューヨークの生活ではその影さえ存在しない。

サカーキーニーはまた、自分がエルサレムにいる夢を頻繁に見る。1908年2月の29日間のうち、前の晩に見たエルサレムの夢について言及しているのは18日（18回）である。その多くは「エルサレムにいる（またはエルサレムに戻った）夢を見た」というフレーズで始まり場所や登場人物が言及されているほか、詳しい夢の内容を記録している日もある。夜の夢だけでなく、ニューヨークの気候からエルサレムとの隔絶を味わったり（「エルサレムのような空はどこに？」[1908/3/3]）、逆に類似を感じてエルサレムにいることを妄

(19) カッツは、パレスチナ知識人の日記の習慣を、近代西洋の知の流入とアラブ圏における日記の伝統の両面から考察している。Katz, Kimberly 2009. "History and Hystography of the Diary". *A Young Palestinian's Diary: The Life of Sāmī 'Amr*. University of Texas Press. pp.35-53.

(20) 原文ではカローナとされているが[1907/10/8] おそらくエルサレム近郊のカローニヤーのことであろうとの註が編集者によって付けられている。

(21) ここに10月3日という日付が言及されているが、サカーキーニーが日付へのこだわりを持っていたのは明らかで、彼はさまざまな記念日を思い出したり、ある出来事からの日数を意識することが多かった。こうした傾向は生涯に渡って一貫しているが、アメリカ滞在中のサカーキーニーに付いてまわったのは、スルターナから受け取った数少ない手紙の日付である。「君の最後の手紙は、今月の2日付だった」[1908/4/26]「君が手紙を書いてくれず、私だけが書くま 86 日間が過ぎた」[1908/6/28]。

想し（「エルサレムの風が私に吹いてきたように感じた」[1908/3/29]）、ブルックリンの景観をエルサレムのそれと比較する。

ようするにサカーキーニーの生活は、ニューヨークにいながら、実のところエルサレムで過ごしているようなものである。「ほぼ毎晩、私はエルサレムを訪問し皆に会う」[1908/4/11]。昼は毎日のようにエルサレムにいる者（家族またはスルターナ）に手紙を書き、旧知のエルサレム出身者とともにエルサレムを懐かしむ。「ハンナー・ハシュマの店に行くと、そこでジャミール・アウダにも会った。我々はまたもやエルサレムのことを懐かしがり、エルサレムでの生活ほど美しいものはない、と私は彼らに言った」[1908/4/20]。日夜エルサレムに思いを寄せていることは、彼にとってまったく否定すべきことではない。

オスマン期のエルサレムが暗く惨めなものであったというそれまで支配的だったイメージは、近年、活発な文化活動と社交生活の中心地として、近年のパレスチナ史研究において急速に見直されている²²⁾。国外の同国人の視点という限定付きながら、サカーキーニーの過剰なまでの望郷心とエルサレムの生活への高い評価に着目する作業を、そうした捉え方の変化に倅さすものとして捉えることも出来よう。

3 シリア人コミュニティへの〈想像〉

祖国と同胞の呼称

このようにサカーキーニーが郷愁を寄せる対象はつねにエルサレムであり、シリアではなかった。夢の中での居場所や、スルターナへの呼びかけのなかで具体的な情景とともに

意識されているのはつねに「エルサレム」という町の固有名である。そのエルサレムは、より大きな単位としての国（シリア）につながるものではなく、エルサレムやその周辺の村々の具体的な光景、そこにある事物、人間関係から構成されるものだった。一方、ニューヨークで交流したり見かけたりする同胞人は「シリア人」と総称するよりほかになく、こうした文脈で意識されたりアメリカ社会と比較される場合の故郷の名は「シリア」である。

当時、「スーリヤー Sūriyā（シリア）」と並んで「ビラードッシャーム Bilād al-Shām（シャームの国）」という呼称も一般的であり、現在もアラビア語で歴史的シリアを指す場合はこの語が使われる²³⁾。シャーイェグによれば、19世紀半ばから、単に地理的な概念ではなく、「ビラードッシャーム」はアラブナショナリズムの高まりの中でこの地域の人々のワタンとしてナショナルな意味を帯び始めた。そしてヨーロッパでの呼称であった「シリア」もこの頃、同様の意味づけのなかで使われるようになったという²⁴⁾。だがサカーキーニーの日記のなかでは「シャームの国」の呼称は使われず、もっぱら「シリア」が用いられている。英語の Syria/Syrian(s) と発音が似ている利便性もあったかもしれないが、アメリカでの移民社会のなかでは「シリア（スーリヤー）／シリア人（スーリー [単数]／スーリーユーン [複数]）」という呼称が一般的だったようである。

サカーキーニーにとってアメリカのシリア人たちは、「ここにいるシリア人たちは性格も考え方もたいへん下劣である」[1908/1/1]と親友ダーウドに訴え、エルサレム出身の旧友に会えば「エルサレムの友人に匹敵する者はいない。…シリア人すべてに会うよりもはる

22) 次の回想録の刊行は、その重要な一例である。Jawhariya, Wāṣif, 2003. *Al-Quds al-'Uthmāniyah fī al-Mudhakkarāt al-Jawhariya: al-Kitāb al-'Awwal min Mudhakkarāt al-Mūsīqī Wāṣif Jawhariya, 1904-1917*. Mu'assasat al-Dirāsāt al-Filastīniyah, 2003.

23) シャーム shām の語源的解釈はいくつかあるが、北／左を指す shamāl と語源的に近接しており、7世紀のアラビア半島からシリア・メソポタミアにかけてのムスリム軍の征服時代に、南／右を指すイエメン yaman と対比して使われたというのがその一つである。

24) Schayegh, Cyrus. 2017. *The Middle East and the Making of the Modern World*. Harvard University Press. P41

かに良い」とわざわざ付言するような存在だった。だが、それはあくまでアメリカで暮らし、アメリカ的な生活様式を進んで受け入れているようなシリア人である。「自分の言語でない言語を話し」「アラビア語の新聞を読まなくなっている」シリア人のありさまを見て、サカーキーニーは在米シリア人たちの社会が「いつかユダヤ人の社会のようになることが心配だ」という懸念を示している[1908/4/28]。日々エルサレムの夢を見続けるサカーキーニーが当時自覚していたかどうかは別として、アメリカでの生活は彼に、エルサレムでの社会生活を越えた「シリア」を想起させ、その将来を案じさせるものでもあったのだ。あくまでそれは一つの領域としてではない、移民も含めたシリア人が構成するコミュニティとしてのシリアであったはずだ。

アル＝ジャーミアと「我々シリア人」

生計の手段としては極めて不十分だったものの、サカーキーニーのアメリカ生活にとって「アル＝ジャーミア」とその発行人ファラフ・アントーンラフの存在は極めて大きなものだった。

サカーキーニーとファラフ・アントーンが知り合った経緯は不明であり、上述のとおりサカーキーニーはアントーンに事前に自身の渡米を伝えていない。となると彼はアル＝ジャーミア紙の一読者であるに過ぎず、ニューヨークに渡っていきなりアントーンを訪ねたという可能性も捨てきれない。いずれにせよアントーンはサカーキーニーに英語のテキストのアラビア語訳や論考の執筆を依頼し、1月18日には「2ヶ月前に移民グループに加わった気鋭作家」として紙面にサカーキーニーの名前を紹介している。サカーキーニーがアントーンを敬愛していることは日記で再三記され、アントーンもサカーキーニーを精一杯遇し、彼に与える仕事を見つけようとしている様子が伺える。

しかし「アル＝ジャーミア」の経営も思わ

しくなく、サカーキーニーがアル＝ジャーミアの常勤の社員として雇われることはない。サカーキーニーは絶望の情をつづった自作の詩をアントーンに読ませることまでしている[1908/2/20]。最後にサカーキーニーが就いたラムフォード（メイン州）の工場での仕事は、アントーンの友人の斡旋によるものだった。

ファラフ・アントーンは1874年、レバノンのトリポリに生まれたジャーナリスト・作家であり、ルソーやモンテスキュー、ヴォルテールといった西欧啓蒙主義に影響を受けた知識人である。1897年にエジプトに移り、まずアレクサンドリアで雑誌「アル＝ジャーミア」を刊行した。1907年にアメリカ合衆国に移り、同名の新聞および雑誌を刊行したが、サカーキーニーがエルサレムに戻ったあと、アントーンもまた1909年にエジプトに戻っている。

サカーキーニーのアメリカ滞在時の出来事として注目に値するのは、1908年の年頭、アル＝ジャーミア紙が駐米オスマン国大使への要請状の文面を掲載し、在米シリア人たちから賛同者を集め、大使館に提出していることである。これは19項目の要請からなるもので、新しい大使の赴任に対する最大限の歓迎の意思表示から始まっている。文面では直接の言及はないが、前任の駐米オスマン大使がトルコ人、その前はギリシャ人であったのに対し、1907年の11月に赴任したムハンマド・アリー・ベイはシリア人であり、アラビア語での要請文への反応に期待が持てるという背景があった。要求項目の第一は、自分たちの歓迎の意を受け、大使にニューヨークを訪問して欲しいというものである。二つ目はシリア人移民に関する法整備を求めること、第三にシリア・アメリカ間の経路での移民の保護、第四はアメリカにおいて困窮するシリア人の保護、と続き、商業の保護など経済状況の改善をはかることを訴えている⁽²⁵⁾。

要請文のかたちを取ってはいるが、これは

(25) *al-Jāmi'a*, 1908-vol.2. pp.25-46.

シリア移民という存在自体がオスマン国家から正当に認知されることを意図した文書と言える。現状ではシリア移民の存在に法的な根拠が与えられていないため、彼らはシリアから「あたかも盗人のように」出入国をするしかない存在である。ドイツ人、フランス人、イギリス人、ロシア人と、世界中であらゆる民族が移民している世界にあって、移民は犯罪ではないはずだが、役人が、法的・宗教的・倫理的に不正な利益を得ているのが現状である（賄賂によって旅行許可証を出していることを指す）。海外渡航者に対するオスマン国家の保護のない現状にあって、貧しい家族がブローカーに騙され大金を支払い、実際には「中に新聞紙が入っている」旅行書類一式を渡され船の中で騙されたことに気づくといった事例さえ存在する。また、アメリカ国籍を取得したシリア人は敵視され、堂々とシリアへ一時帰国することが出来ない、等々とシリア移民が置かれた窮状を訴える。

オスマン末期の段階で、法的にきわめて不安定な立場のままアメリカに渡ったシリア移民が、その「非合法の」立場を自ら明らかにしつつ、集団としての立場の承認を求めた動きの存在を示すものとして、これは注目すべき文書であろう。1908年4月の「アル＝ジャーミア」誌は、11のアメリカ紙がこの動きについて記事にしたことを伝え、「約2,100人（正確には2,086人）のシリア人が一つの方針の上に足並みを揃えた」と成果を表現する。

サカーキーニー自身は、アントーンに指示されてこのキャンペーンに関わる業務を手伝う裏方であり、この取り組みに没頭するアントーンの様子を日記に記すほかは、特に自身の感想を記していない。だが、公的な機関の支援もないまま海を渡りそれぞれアメリカ生活を始めたシリア人たちに対し、彼ら共通の問題をオスマン国家との関係において把握す

る見方を示し、「我々」シリア移民として共通の利害関係を提示しているジャーナリズムの現場に、サカーキーニーは少なくとも立ち会ったのである。こうした経験がのちの彼の文筆活動と政治活動にどのように影響を与えたのかについては、稿を改めて検討してみたい。

パレスチナというアイデンティティと、サカーキーニーの「ワタン」

一方で、「パレスチナ」という呼称をサカーキーニーが用いることもないわけではない。キリスト教の神学校の教師と思われる「ヘンリー氏」にアラビア語の個人教授をした時で、彼の学習熱心さに気持ちを動かされたサカーキーニーは「英語がもっと出来たなら、学校でパレスチナに関する講義をしたいところだ」と口にする[1908/4/22]。ヘンリー氏に励まされたサカーキーニーは珍しく前向きな気持ちをもったばかりか、おそらくこの出来事に影響されてか、自分の父親に対し、仕事が無くなったならパレスチナについての講義をすると伝えているという夢さえ見る[1908/5/1]。

アメリカ滞在中の日記の中で、サカーキーニー自身の言葉として「パレスチナ」という呼称が用いられているのはこの箇所だけである²⁶。神学校の教師に対し、おそらく彼の勤める神学校で講義することを想定した「パレスチナ」とは、聖書の舞台としての地である。この地の出身者として、その現実の生活や他宗教への言及など豊富な話題はあるにせよ、まず聖書の舞台として意識されているからこそ、サカーキーニーは「パレスチナ」の語を用いたのである。

ラシード・ハーリディーはその広く知られる書において、誰もが知るベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を念頭に、「20世紀初頭にパレスチナの多くの住民が、明確

²⁶ 上述の夢を見たのと同じ日、エルサレムの写真集の行商をはじめたサカーキーニーに対し前述の「ニース博士」は、ロンドンにあるような「パレスチナ関係のビジネスのエージェント」になったらどうかと提案している。しかしニース博士による発案であり、ここでサカーキーニー自身が「パレスチナ」という言葉を用いていたかどうかは不明。

な領域と主権をともなった政治的共同体」に属する者として自身を「想像した」と述べ、イギリスの委任統治によってではなく、この当時にパレスチナという領域への意識が作られていたと主張している。ハーリディーがまず依拠するのはアラブ民族主義者ナジブ・アーズリー [1873-1916] が1908年11月23日に書いた論文で、彼はそのなかにパレスチナの「ネイションとしての共同体の初期の意識」を見ている⁽²⁷⁾。だが、オスマン行政官であるとともにクリスチャンとしての教養をもつアーズリーが「パレスチナの地の発展」を強調することと、住民が政治的共同体としてそれを意識することのあいだには距離があるだろう。さらにハーリディーはショルヒ⁽²⁸⁾に依拠しつつ、エルサレムを聖地として描いた19世紀の歴史書のなかで、ヘブロン、エリコ、ベツレヘム、ナーブルス、ラムレ、サファド、アシュケロン、アッカ、ガザ、ナザレなどが訪問すべき聖地として挙げられていることから、こうした地名によってパレスチナの大雑把な領域が示唆されているとする⁽²⁹⁾。しかしこうした場所を結んだエリア全体を聖地と意識することと、自分がそこで働き、その発展のために尽くそうとするネイションの意識は、必ずしも一致しないだろう。パレスチナは文化的または宗教的なアイデンティティの拠り所であっても、住民の政治的・経済的・社会的な活動の範囲がそれと重なっていたわけではない。

サカーキーニーに関しては、アメリカ社会からの疎外感を味わいつつシリア移民として暮らすという経験を経ての憲法復活の報を目にしたことで、今後自分が生きるワタンを「シリア」という語によって〈想像〉することがきわめて自然であり、この段階での「ワタン」とはパレスチナの名によって把握されるものではなかった。留意したいのは、彼に

としてのワタンがパレスチナではなくシリアであったという点ではない。サカーキーニーがひたすら恋い焦がれていたエルサレムは、ただ一年前と同じ望郷の地エルサレムではなく、サカーキーニーがワタンとしてシリアを選び直したことで、エルサレムもまたワタンの観念によって把握され得る対象になったことである。

1908年9月10日にエルサレムに戻ると、サカーキーニーはまず、自身が属するエルサレムのギリシャ正教コミュニティの改革運動に関与する。憲政復活により唱えられた、帝国内のすべての民族集団が平等な兄弟であるという理念は、エルサレムの各宗教集団にも強い影響を与え、アラブ人信徒が教会組織にコミットする権利要求の声が起きたのである。また翌1909年に彼は、エルサレム旧市街のなかに「ドゥストゥーリーヤ学院」を設立する。ドゥストゥーリーヤとは「憲法／憲政の」という意味で、革命を強く意識した名称であることは明らかだ。サカーキーニーはこの学院で、当時一般的だった体罰を「野蛮で中世的」なものとして禁止したほか、試験を廃止し、生徒の自己評価方式に代えるなど、画期的な教育を試みたことが広く知られている。アメリカでの9ヵ月間は、その後の彼の変化に富んだ人生の、ほんの序章に過ぎないように見える。

アメリカでの生活とはうって変わり、サカーキーニーは水を得た魚のように自分の属するコミュニティの活動に没頭し、生き生きとした暮らしを取り戻した。アメリカ生活における彼の絶望と疎外感、あまりにも八方塞がりな状況と、エルサレムにもどってからの活躍ぶりとのすさまじい落差は、人間としての「ワタン」の意味を端的に示している。

(27) Khalidi, Rashid. 1997. *Palestinian Identity: The Construction of Modern National Consciousness*. Columbia University Press. pp.28-9.

(28) Schölch, Alexander. 1993. *Palestine in Transformation 1856-1882*. Institute for Palestine Studies.

(29) Ibid.

おわりに

今日、パレスチナ人のワタニーヤ、すなわち「愛国心」や「郷土意識」の対象としての地はイギリス委任統治時代のパレスチナ領であり、その細長い三角形のようなかたちをとった領域は、パレスチナ人の帰還権の対象としてだけでなく、彼らのアイデンティティの拠り所として、さまざまな視覚表現のなかで繰り返し用いられている。しかしもともとこの地に住む人々にとって、ワタンとは領域として捉える対象ではなかった。逆に言うならば、領域として捉えるのとは別のかたちで、イギリス委任統治によってパレスチナという領域が確定する以前から、ワタンへの意識は

芽生えていた。

委任統治に先行するオスマン末期から現在まで、100年あまりの時間が経過し、その間にパレスチナという領域が委任統治領としておよそ30年維持され、それは現在、シオニズムという排他的な性格をもつ運動によって領域的にはほとんど消滅させられた。一方、現在の中東各地における動乱と混迷の起源を考えると、この地域にそもそも領域という概念が持ち込まれ、住民にそれを一方的に強いたことの意味を問い直さずにはいられない。それは中東地域に限らず、領域概念をともなったナショナリズムのありようそのものを再検討する契機でもあるのではないだろうか。